やまと万葉がたり

かるうすは　田廬の本に　わが背子は　にふぶに笑みて　立ちませり見ゆ

河村王（巻十六・三八一七）

本歌では、田に立てた小屋の中に唐臼がある様子が詠まれています。唐臼は、二人が向き合って足で踏んで舂く臼のことです。古代において、米（稲）を舂く作業は女性の仕事でした。その様子を笑顔で見守る男性が描かれています。

日本人にとって、米は主食であり、古代においては物々交換用の作物としても広く利用されていました。江戸時代では各大名の国力を示す際には、米の収穫高である石高を用いており、古代から近代初期に至るまで税の基本でもありました。

日本の稲作は、縄文時代晩期に始まり、弥生時代には広く受容されていったと考えられています。赤や紫の色素を含んだ、いわゆる古代米が飛鳥時代までの主要な品種でした。

米（稲）が人間の口に入るまでには各種の段階があります。種蒔きから収穫を経て、刈り取られた米にも複数の呼び名があります。臼で少し舂いたものを穀あるいは籾と呼び、さらに舂いたものを黒米、さらに舂けば白米（舂米）と呼ばれます。現在造られている大吟醸酒の原料米となると、さらに米を磨き（削り）、精米歩合が小さくなったものを用います。

現代人の多くが連想する米といえば白米です。しかし、古代の庶民が食べたのは黒米です。黒米は、現在の玄米よりも精米されたものと考えられています。玄米の炊飯には燃料と時間がかかったためです。

古代人が白米を食べる機会は少なく、主に上層階級が口にしていました。精米方法（米を舂く手段）が重労働であったことも理由の一つです。本歌を詠んだ河村王は、米を舂く機会はなく、重労働とは捉えていなかったために、このような歌を詠めたのかもしれません。

（県立万葉文化館主任研究員・中本和）

≪訳≫唐臼は田の伏屋の中ですよ。あなたがにこにこと笑って立っておいでなのが見える。

朝霧の たなびく田居に 鳴く雁を 留め得むかも 我がやどの萩

光明皇后（巻十九・四二二四）

やまと 万葉がたり

本歌は、左注によると、吉野宮行幸の際に光明皇后が詠んだとし、年月は不詳と記します。

聖武天皇の吉野行幸は、『続日本紀』神亀元（724）年2月と天平8（736）年6月～7月が見えます。また、『万葉集』巻六・九二〇題詞は神亀2年5月の行幸を記します。

雁と萩はどちらも秋を示唆する語です。雁は晩秋に渡ってきます。一方、萩は新暦7月下旬から花が咲きはじめ、9月に見頃を迎え、10月まで見られます。また、『万葉集』の歌から、雁が渡ってくる少し前か同じくらいに、萩の花が咲くと認識されていたことがうかがえます（巻十・二二六、巻十・二三七六）。これらから、歌の詠まれた時期が新暦9月下旬から10月と想定できます。

しかし、記録に残る聖武天皇の吉野行幸は、いずれも時期が合いません。よって、上記以外に行幸のあった可能性が高いのです。

そこで、手がかりとなるのが、左注の続きに記された「十月五日、河辺朝臣東人が伝誦せるなり」の一文及び、巻十九に収載される歌の年代です。伝誦とは口から口へと伝えることです。すなわち、この歌を収載した大伴家持は、光明皇后が歌を詠んだ場にいなかったのです。巻十九は、天平勝宝2（750）年3月の歌に始まり、同5年2月で終わります。おおよそ、年月日順に並べられ、本歌の前後四二二三・四二二五番歌に、それぞれ9月3日と10月16日の日付が見えます。東人が家持に本歌を伝誦したのは、天平勝宝2年の10月になります。

つまり、本歌が詠まれたのは、家持が越中赴任中で、吉野行幸に同行できなかった、天平18（746）年から天平勝宝2（750）年の晩秋にあたるのではないでしょうか。

（県立万葉文化館主任研究員・中本和）

≪訳≫朝霧がたなびいている田で鳴く雁を、とどめることができるだろうか。わが家の萩は。

やまと 万葉がたり

蟋蟀の 待ち歓ぶる 秋の夜を 寝るしるしなし 枕とわれは

（作者未詳 巻十・二二六四）

明和6（1769）年10月30日、江戸時代中期の国学者である賀茂真淵が亡くなりました。荷田春満・本居宣長・平田篤胤とともに「国学の四大人」とされる真淵は、『万葉集』の研究で有名です。自作の歌でも万葉歌のような古風な表現を用いる傾向があり、「こほろぎの待ちよろこべる長月のきよき月夜はふけずもあらなん」（『賀茂翁家集』）など、明らかに万葉歌を踏まえた歌も残しています。

『万葉集』には「蟋蟀」を詠んだ歌が7首あります。いずれも四季分類された巻の「秋」の部立て中に収められており、うち5例は題詞にも「蟋蟀」と記されています。「蟋蟀」は中国詩にみえる詠題であり、その趣向と漢語の表記がそのまま和歌に取り入れられたことがうかがえます。

「蟋蟀」は、古写本では「きりぎりす」と訓読されていましたが、それを否定して「こほろぎ」の訓を提唱したのが賀茂真淵でした。「きりぎりす」は5音、「こほろぎ」は4音で、例えば当該歌も「きりぎりすの」ではなく「こほろぎの」と訓読する方が自然です。以降、現在に至るまで真淵説が定説となっています。

コオロギもキリギリスも鳴く虫の代表格ですが、平安時代以降の和歌では、秋に美しく鳴く虫といえば「きりぎりす」と認識されていたようです。「こほろぎ」が和歌に詠まれなかったのは、両者が区別されていなかったためともいわれます。

秋の夜長に、茶褐色の地味な見た目からは想像できない美しい音色を響かせるコオロギですが、音を出すのは雄だけであり、求愛のためだそうです。それを知っていたからこそ、この歌の作者は独り寝のわびしさを「寝るしるしなし枕とわれは」と表現したのだろうと思います。

（県立万葉文化館・井上さやか）

≪訳≫コオロギは到来を待ち歓ぶ秋の夜だが、寝るかいがない。枕と私とは。